



森と生きる ～愛南町の林業～

美しい大自然に囲まれた愛南町。
農林漁業を基幹産業とする町は海と山に囲まれマダイやブリ、カキなどの海面養殖業をはじめ、
カツオの一本釣りや巻き網漁業など多種多様な水産業が営まれています。

『豊かな森林は豊かな海を育む』

海に生きる魚介類や海藻、プランクトンの多くは日本有数のリアス海岸である
御荘湾や深浦湾の沿岸域に生息しています。
森林で微生物が分解した落ち葉や枝は腐葉土を形成し、海藻やプランクトンの成長を促す
栄養素として海に運ばれ、豊かな『愛南町』の海の生態系へとつながっていきます。



日本の林業の歴史

昭和20～30年頃に向け、日本は戦中・戦後の復興のために木材需要が急増し、政府はその対策として大規模な造林政策を実施しました。天然林は伐採され、成長が早く住宅建築に必要な杉やヒノキなど経済的に価値の高い針葉樹を中心に植栽が進められていきました。

また、それまで木炭や薪を中心としていた家庭燃料は電気やガス、石油へと切り替わり、燃料革命と共にエネルギー源としての木材価値は下落。里山の雑木林は広葉樹から針葉樹へと様相を変え、全国的に造林ブームが起こりました。



輸入木材の増加

昭和30年代を皮切りに木材輸入の自由化が始まり、国産材と比べて安く一度にまとまった量を供給できる外国産の木材は、年々輸入量を増加させていきました。

その後、円高の影響もあり国産材の価格は落ち続け、昭和55年をピークにヒノキの木材価格は低落し、日本の林業経営の難しさが浮き彫りとなってきました。一方で植栽は続けられ、全国の森林には膨大な人工林が蓄積されていったのです。

森林大国日本の現状

日本の国土面積の約7割を占める森林。その約4割にあたる人工林は民有林を中心に管理が行き届かず、伐採されないまま放置林になっていることが問題視されています。

戦中・戦後に植栽され、木材として使用できる太さに育った樹木は伐期齢を迎えているものの、森林所有者の林業に対する意欲の低下、国産材の価格低迷、林業従事者の高齢化や減少などさまざまな要因が重なり、林業の衰退へ拍車をかけています。

間伐されず放置されて枝が乱雑に伸びた人工林では、下草を育てるために必要な日光が地表に届かず、土壌が痩せ、森林の持つ水源かん養機能や土砂災害防止機能の低下から台風や大雨による土砂災害を引き起こす可能性が大きくなります。

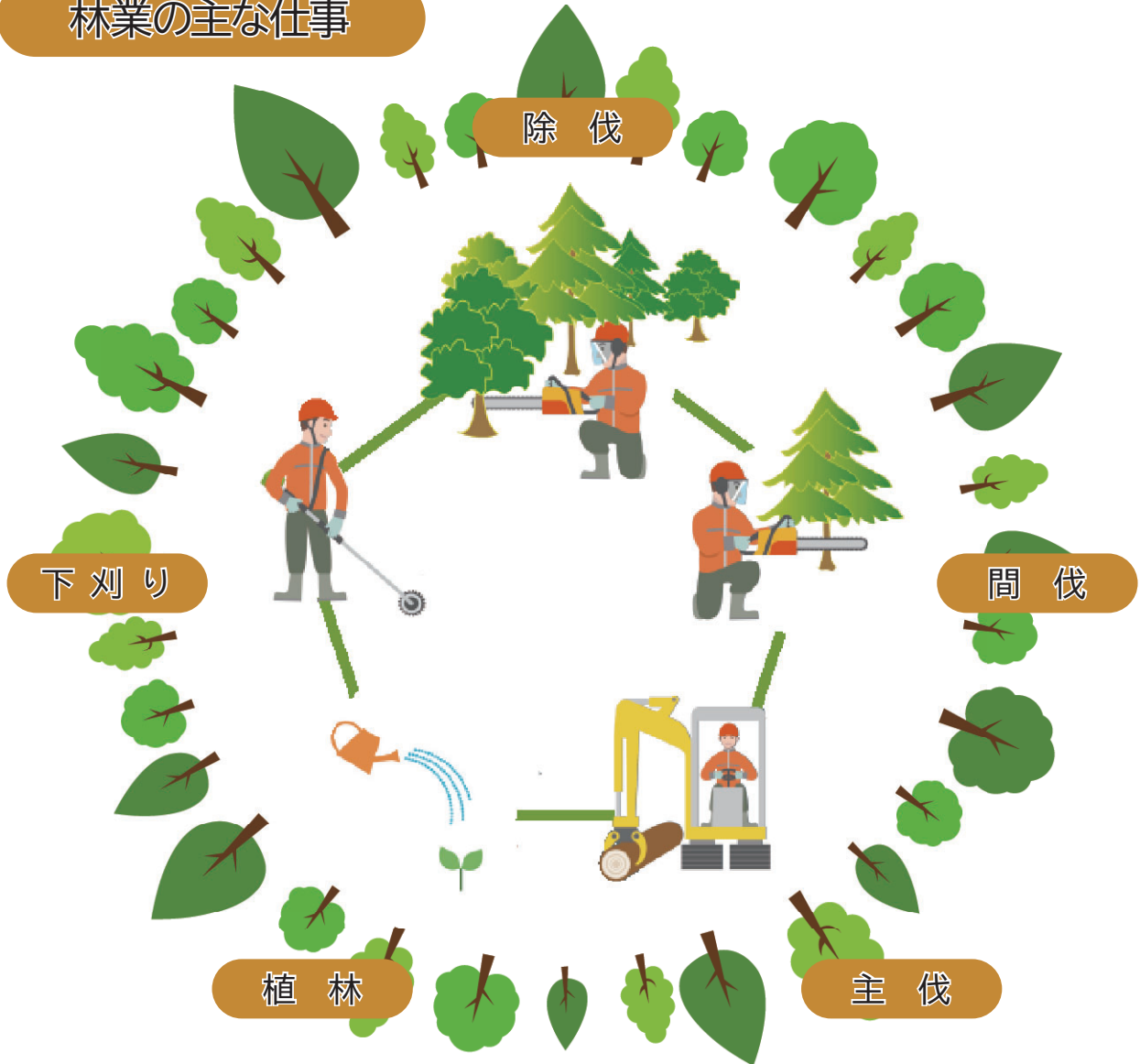
さらに、高齢となった樹木は二酸化炭素の吸収量が減少傾向となり、地球温暖化防止の機能が低下するなど、森林のもつ多様な保全機能も低下していきます。

『木を切らないことも森林破壊』

そこで、元気な人工林にするため適切な間伐や伐採を行い、植林をして再造林を行う。森林の健全な育成と共に持続的な資源の活用とさまざまな動植物が住みやすい環境を得るため、そして豊かな海の生態系を守るためにもバランスの取れた森林施業のサイクルを回していくことが必要なのです。



林業の主な仕事



除伐

育成途中の幼木の中で発育がよくない木を伐採することです。他の木の生長を妨げたり、曲がってしまっている木が対象になります。

間伐

森林の込み具合に応じて樹木の一部を伐採し、残った樹木の生長を促すことです。

主伐

樹木を収穫し、木材として利用するための伐採です。一度に全面積を伐採する「皆伐」と、何度かに分けて抜き切りする「択伐」があります。

植林

手作業で一本一本植えられます。植林後の苗は、鹿による食害を防ぐためにネットなどを設置する必要があります。

下刈り

植林後の苗木が雑草木に養分を取られることなく、良く生長するように周りの草を刈る仕事を行います。



愛南町の林業～過去から現代～

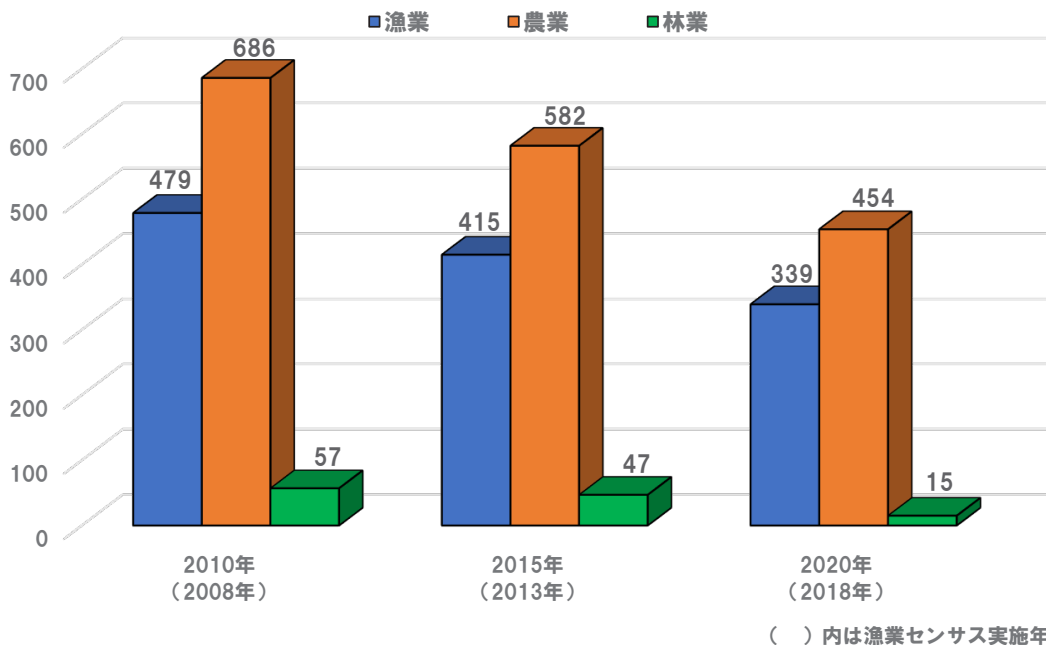
昭和の終わり頃までは、森林所有者や地域が主体となって伐採・搬出・出荷までを一貫して行う『自伐型林業』を中心に管理・経営が行われてきました。

しかし、1次産業全体を取り巻く経営体の減少と共に、林業においても担い手不足の深刻な課題に直面し、町内の林業経営体数は、直近10年の間で4分の1にまで減少していきましました。

南宇和森林組合においても、平成30年には20人在籍していた作業員が現在では14人まで減少し、労働力不足の課題が顕著に表れています。

【資料】農林業センサス・漁業センサス

愛南町における1次産業経営体数の変化



先人たちが大切に管理・経営してきた町内の森林を守るため、そして林業生産活動を継続・活性化させるため、南宇和森林組合ではさまざまな取り組みを行っています。

森林組合とは

森林所有者が協同で林業の発展を目指し、設立した組合です。所有者の森林経営のために、経営指導や施業の受託、共同購入、林産物の加工・販売など、組合員が利用する事業を行っています。

南宇和森林組合では地域の森林整備や、森林経営など森林に関わる事業全般を担っています。一年を通して行う森林整備では、植栽・保育・間伐などを適切に行うことで健全な森林を造成し、森林の循環を進めています。



担い手の育成・確保のために

力仕事が多く、危険と常に隣り合わせであることから、新たな担い手を取り込むことが難しい職種である林業。林野庁では「緑の雇用」事業として、新規就業者が林業に必要な技術を学ぶための講習や研修プログラムを用意しています。

また、南宇和森林組合では労働安全対策の取り組みとして、防護機能を有した安全装備品(チェンソー防護ズボン・林業用ヘルメット・防振手袋など)を作業員へ支給しています。



高性能林業機械の導入・スマート林業

林業の現場では仕事の効率化や安全性を図るために機械化が進み、南宇和森林組合でも平成21年に高性能林業機械『ハーベスタ』が導入されました。以降、平成29年と令和4年に1台ずつ順次導入を進め、毎年約8,500㎡の木を伐採し、搬出・出荷をすることが可能になりました。

さらに『グラップル』・『フォワーダ』の導入により集材から運搬までが機械化されたことで、作業員の負担が大幅に軽減し、生産性の向上や良質な作業環境が整いました。

また、林業界においてもICT化の一環としてドローンを活用した森林管理も進められています。カメラを搭載したドローンで空撮することにより森林の状況、作業の進捗を一目で確認することができ、計測や調査対象に合わせたスマート技術を活用することで大幅な省力化が図られています。

町内の森林は日本各地の森林と同様に伐期齢を迎えており、近い将来には木々の更新が必要になります。主伐の終わった森林に多くの苗木を植栽し、苗木の運搬は産業用ドローンを活用して作業負担を軽減するなど、さらなるスマート化に期待が寄せられています。

『スマート林業とはより良い林業を目指すためのもの』

次世代に美しい森林を残すため、林業従事者の安全性を確保し、雇用を安定化させることが、担い手の確保と育成の実現につながっていくのです。



現場で働く高性能林業機械

高性能
林業機械



01. ハーベスタ

立木の伐倒・枝払い、玉切りまで一貫して行える。玉切りの際には運転席にあるモニターで長さが確認できるため、造材の効率も格段に向上。

02. グラップル・フォワーダ

ハーベスタが伐り出した木材は、掴むことに特化したグラップルで集材車輛のフォワーダに積み込み、木材運搬トラックが入れる場所まで運び出す。

03. フェラーバンチャザウルスロボ

この一台で【掘る】【伐る】【掴む】の作業がこなせる。作業道の開設には欠かせないスーパーマシン。



南宇和
森林組合
YouTube



誇りある林業の仕事

林内で林業機械を十分に活用するためには、作業道の開設が必要不可欠です。伐採から搬出までの作業をスムーズに行うために作業地の雑木や雑草を除去し、道の存在しない山奥の斜面に作業道を開設していきます。数十年前には多くの作業員が長い月日をかけて行ってきた作業も現代では高性能林業機械をはじめ、重機の効率的な活用により省力化を図っています。

しかし、現在でも作業員による人力での作業が必要な場面はまだ存在します。その一つが『治山事業』での林内整理です。伐採された木は材木として出荷するほか、森林が持つ保全機能を高めるため、斜面に沿って横に並べられ、大雨が降った際に土砂流出を防止する柵としての役割を果たします。しかし、重機の使用ができず全て作業員の手によって行われるため、体力が求められる作業です。山の持つ土砂災害防止機能は、作業員一人一人の手によって高められ、災害から住民の安全を守っているのです。

林業は森林を守り育て、森林の機能を最大限に生かす仕事。そんな林業の世界に足を踏み入れた『移住者の男性』と『若い女性』。2人の新規従業者に、林業の魅力とやりがいについて聞きました。



自然豊かな愛南町に魅了され兵庫県宝塚市から家族5人で移住することを決意。前職の営業職から愛南町でしかできないような仕事に携わりたいと考え、令和4年4月に森林組合へ入組。危険と隣り合わせの仕事であることを理解し、今の自分を応援してくれる妻や家族のために、毎日けが無く無事に帰宅することを一番に心がけている。

— 林業未経験の入組で不安は？

南宇和森林組合の募集条件は年齢54歳未満でした。同年代の中では自信があるものの、52歳である自分が体力的にやっていけるのかと不安もありました。

現場仕事は建設業や漁業、農業などたくさんありますが、林業は山ならではの雰囲気神秘的というか、神聖な感じがします。実際、きつい部分もあつたけどふと空を見上げると「あー、気持ちいいな」って思うんです。デスクワークよりも外で体を動かしている方が自分の性分に合っているんです。

— 組合での仕事環境は？

常にチームとして現場に入るんですが、人間関係も最高の職場環境だからすごく働きやすいです。緑の雇用で実習に行けば18歳の子たちと一緒に学ぶこともあり、とても刺激を受けます。

チェーンソーをメンテナンスすることの重要性についてもすごく感じるようになりました。毎日使う大切な道具なので、滑らかに切れるように目立てを欠かさずしています。とても奥が深い作業だなと。

立木を伐倒する際は次の作業を考えながら伐倒方向を決めるのですが、倒したい方向とは反対に重心が寄っている木も多く、そういう時はとても緊張します。でも、先輩たちから教わったことや研修での学びを生かして、思い通りの方向に倒せたときは爽快です。

年齢は自分の方が上だったりしますが、常に教えてくれる先輩がいる環境は本当にありがたいです。



— どういう思いで作業に取り組んでいますか？

現場に生えているのは樹齢50〜60年の木です。それらの木を伐採できるのは、先人たちが大切に山を守ってきたくれたおかげです。機械化の進む現在とは違い、昔の人たちは一生懸命に手作業で山を守り、私たちの代につないでくれました。その先人たちに対する感謝の思いを胸に、作業をしています。

木に対しても立派に育ってくれてありがとう、切らせてもらいますよっていう気持ちで向き合っています。

豊かな森林があるおかげで仕事ができる。生きる糧をいただいているという気持ちを常に持っています。

1次産業の中でも男性職のイメージが強い林業界に足を踏み入れたのは令和4年6月。女性が潜在能力を発揮できる環境で林業の素晴らしさを体感し、南宇和森林組合初の女性作業員としてたくさんの人に林業の世界を知ってもらいたいとinstagram⇒
で森林作業員の仕事を発信している。



— 林業の世界に入ったきっかけは？

勤務先のカフェオーナーが林業を兼業していたんです。今まで見たことのない世界に興味湧き、見学をさせてもらいました。初めてみる林業の世界はすごくかっこいいと思える仕事でした。

オーナーに林業の仕事がしたいことを伝え、ノコギリで枝を切るなどの簡単な作業をさせてもらい、林業の仕事に触れたことで本格的に林業の仕事がしたいと思い、森林組合へ入組しました。

カフェのオーナーは「自伐型林業」と言って自身が山林を管理、間伐していました。伐採は全てチェーンソー、運搬も小さな機械を借りて手作業だったので、組合で初めて見たハーベスタでの伐採やユンボで山の中に道を抜いていく作業を見て『すごい！』と思いました。何もないところに道が出来上がっていくことに感動を覚え、自分もできるようになりたいと思ったんです。

— 女性作業員として大変なことは？

女性作業員として働く上で、苦勞していることは何もありません。組合の人たちの人の良さもあり、男女関係なく伐採から重機の運転まで色々な仕事をさせてもらっています。

男性作業員の使用するチェーンソーよりも軽量なものを購入していただくなど配慮もしていただきました。先輩方からは女性の方が繊細な仕事ができるし、機械も丁寧に扱ってくれると言っていたきま

— 林業の一番の魅力は？

営業職や農業をしていたこともありですが、別職種を経験してきたからこそ、林業のかっこよさに惹かれたのかもしれない。養殖業や農業と違って山奥で作業する林業は、仕事を見る機会も知る機会もあります。『きつい、汚い、危険』と言われる林業ですが、機械化が進み『林業＝重労働』の世界は過去の事です。

とにかく林業は全てがかっこいい!! 実際に見て経験してもらえば林業に対するイメージが変わると思います。インスタグラムで林業専門アカウントを作り林業のかっこよさを多くの人に見ていただけるよう、発信を続けています。

